

9. 一般日本人における食品群別摂取量と世帯支出、教育歴との関連

研究協力者 長幡友実 (東海学園大学健康栄養学部管理栄養学科 准教授)
研究協力者 中村美詠子 (浜松医科大学健康社会医学講座 准教授)
研究分担者 尾島俊之 (浜松医科大学健康社会医学講座 教授)
研究協力者 近藤今子 (中部大学応用生物学部食品栄養科学科 教授)
研究分担者 二宮利治 (九州大学大学院医学研究院衛生公衆衛生学分野 教授)
研究分担者 由田克士 (大阪市立大学大学院生活科学研究科食・健康科学講座 教授)
研究協力者 荒井裕介 (千葉県立保健医療大学健康科学部栄養学科 准教授)
研究分担者 大久保孝義 (帝京大学医学部衛生学公衆衛生学講座 教授)
研究協力者 村上慶子 (帝京大学医学部衛生学公衆衛生学講座 助教)
研究分担者 西信雄 (医薬基盤・健康・栄養研究所国際栄養情報センター センター長)
研究分担者 村上義孝 (東邦大学医学部社会医学講座医療統計学分野 教授)
研究分担者 高嶋直敬 (滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門 助教)
研究分担者 奥田奈賀子 (人間総合科学大学健康栄養学科 教授)
研究分担者 門田文 (滋賀医科大学アジア疫学研究センター 特任准教授)
研究協力者 宮川尚子 (滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門 客員助教)
研究協力者 近藤慶子 (滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門 特任助教)
研究分担者 岡村智教 (慶應義塾大学医学部衛生学公衆衛生学 教授)
研究分担者 上島弘嗣 (滋賀医科大学アジア疫学研究センター 特任教授)
研究分担者 岡山明 (合同会社生活習慣病予防研究センター 代表)
研究代表者 三浦克之 (滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門 教授)

NIPPON DATA2010 研究グループ

【目的】社会経済的背景 (socioeconomic status: SES) は健康格差の要因になることが知られている。これまでに、所得の低い人は栄養バランスの悪い食生活をしており、例えば、エネルギーや脂質摂取量が高く、ビタミン類や食物繊維の摂取量が低いことが報告されている。しかし、国民を代表する大規模調査データを用いた研究は少ないのが現状である。そこで本研究では、日本人の代表性をもつ NIPPON DATA を用いて、食品群別摂取量と世帯支出、教育歴の関連を検討した。

【方法】2010 年国民健康・栄養調査に全国から参加した成人 2,898 人 (男性 1,239 人、女性 1,659 人) を対象に、SES (世帯月間支出、教育歴) と食品群別摂取量の関連を横断的に分析した。食品群は、摂取量の中央値が 10 g 以上であった穀類、いも及びでん粉類、豆類、野菜類、果実類、魚介類、肉類、卵類、乳類、アルコール飲料類の 10 食品群を分析対象とした。世帯月間支出は男女別の四分位数で 4 群 (小さい方から順に Q1, Q2, Q3, Q4) に分類し、教育歴は中学校卒、高等学校卒、短大・大学卒の 3 群に分類し分析に用いた。各群 1,000kcal あたりの食品群別摂取量の平均値

を算出した。二元配置分散分析を行い、有意確率は $p<0.05$ を採択した。

【結果】世帯月間支出と食品群別摂取量の関連を検討したところ、男女とも Q1、Q2、Q3 では、Q4 と比較して有意に穀類摂取量が多かった。加えて、男性において、Q1 では Q2、Q4 と比較して有意に乳類摂取量が少なく、女性においては、Q1 では Q4 と比較して有意に野菜類摂取量が少なかった。また、教育歴と食品群別摂取量の関連を検討したところ、男性において、中学校卒群および高等学校卒群では短大・大学卒群と比較して穀類の摂取量が多く、女性においても、中学校卒群では高等学校卒群、短大・大学卒群と比較して穀類の摂取量が多かった。また、男女とも中学校卒群では高等学校卒群、短大・大学卒群と比較して肉類の摂取量が有意に少なかった。

【考察】本研究結果から、男女とも世帯月間支出が少ない人は、高い人と比較して穀類摂取量が多いこと、加えて、男性では世帯月間支出が少ない人で乳類摂取量が少なく、女性では野菜類摂取量が少ないことが明らかとなった。また、教育歴の短い人では穀類摂取量が多く、肉類摂取量が少なかった。穀類の摂取過多は肥満につながり、また、肉類の摂取過少は筋肉量減少につながる。したがって、世帯月間支出の少ない人や教育歴の短い人では、このような食事の傾向があることを認識し、よりバランスのとれた食生活に改善することで生活習慣病予防や介護予防につながる可能性がある。

J Epidemiol. 2018;28(Suppl 2):S23-S28